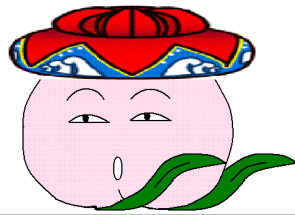
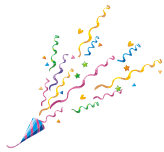


News



第3号は沖縄特集。モモイも花笠をかぶってみました。めんそーれ。



設立5周年パーティ 3月6日(土)開催!



西ヶ原字幕社も、早いもので今年設立5年目を迎えます。昨年10月に移転した新事務所に皆様をお招きする意味も込めて、設立5周年記念パーティを企画いたしました。新年にホームページで告知後、ようやくその全貌が明らかに。3月6日(土)17時開場、17時30分スタート。18時からミニコンサートと銘打って、当社のスタッフが関わる、CEGA(クラシック)、西荻セッション党(ジャズ)、2グループのステージがあります。会場は当社事務所。入場は無料で、ささやかな料理と飲物を準備します。西ヶ原字幕社と少しでも関わりのある方は、どなたでも大歓迎。お気軽にお立ち寄りください。

●沖縄字幕講座、終了

西ヶ原字幕社が韓国語コースを担当した、沖縄・うるま市の字幕制作者養成講座が2月13日に終講。初めて社外に翻訳スキルを伝えた今回の講座でしたが、事務局のサポートと受講生たちの熱意に支えられ、無事この日を迎えることができました。修了試験はトライアル形式で行われ、受講生が3ヶ月の成果を披露。A評定も1名出ました。

本号2面・3面では沖縄特集と題して、講義レポート、運営を担当されたコミックリズ株の小川さんへのインタビュー、受講生の感想、そして林原の雑感をお届けします。



☞食事会にて。
お店は「焼肉明洞」。

☞会場の舞天館にて



●冬季求人、受付中

8回目の定期採用となります10年冬季求人、現在履歴書を受け付けています(2月末まで)。

1月31日には会社説明会を実施。定員を上回る12人の参加がありました。説明会の趣旨は、「映像翻訳で食べていくのは、正直こんなに大変なんです。それを承知で入って来てください」というもの。赤裸々な言葉に、顔を曇らせる参加者も見受けられましたが、めげずに履歴書を送ってくれたツワモノもいました。筆記試験は2月21日(日)と3月7日(日)に行われます。たくさんのご応募お待ちしております。

●字幕社ジャーナルからお知らせ

■現在、ホームページ上で一般公開しております字幕社ジャーナルですが、4号をもってホームページ上での公開は終了、5号からは希望者に郵送(無料)というスタイルになります。皆様にはお手間をおかけしますが、4号公開時から希望者を募りますので、下記アドレスにご一報ください。

■字幕社ジャーナルに登場していただける方を募集しています。特に、よりよい日本語版制作を目指すべく、プロデューサー、ディレクター、声優その他関係者各位との対談を実現させていただいています。ささやかながら薄謝を差し上げます。「出てやろう」という方、お気軽に下記アドレスまでご一報ください。

E-mail: info08@jimakusha.co.jp

沖縄特集 2010

西ヶ原字幕社が韓国語コースを担当した、環金武湾地域雇用創造協議会主催の字幕制作者養成講座が2月13日に終講。今号の字幕社ジャーナルでは沖縄特集と題し、見開き2面でこのプロジェクトを紹介します

講義レポート：1月某日、前日那覇空港に降り立った筆者が一路向かうは、約45キロ離れたうるま市の石川地域活性化センター舞天館。敷地内には闘牛場もある、のどかな立地ながら、1階に研修ホールと会議室・マルチメディアルーム、2階にインキュベートルーム6室を持つ、立派な施設である。研修ホールでは某外資系IT企業の会社説明会が行われていた。

韓国語の講義は12時半から。会場に着き、事務局に挨拶に行くと、お弁当が用意されていた。食事後、さんびん茶を手にマルチメディアルームに入り、8人の受講生に迎えられる。

講義時間は3時間。しかし、受講生はここでしかSSTを使えないため、時間の半分くらいは実習に当てねばならず、のんびりはしてられない。事前に社内スクリーニングで使っている講義テキストを配布したとはいえ、文章では細部まで伝えられないのが字幕の難しいところ。SSTを使って、リライト前とリライト後の字幕を実際に見比べてみる。あるいは、受講生に逐語訳をさせ、字幕と比較させる。当てられるかと思っていなか

った受講生は、戸惑いながらも、韓国語と格闘したり、自分の意見を述べようと懸命だ。

そうしてテキストを読み進めるだけで、あっという間に予定していた実習の時間に食い込んでしまった。しかしここでも思惑違いが。受講生はSSTでの作業に慣れていないため、スポッティングその他に時間がかかり、訳文を練る時間がなくなってしまうのだ。毎日のように字幕の作業をしている我々を基準に時間設定をしてはいけなかった。やむなく課題の範囲を短縮するも、受講生の多くが最後までやり切れないままタイムアップ。2人ほどの字幕を見ながらコメントすると、時計の針は3時半を回っていた。

駆け足の講義だったが、後日、受講生が施設開放日を使い、課題をやり切って事務局に提出。ファイルが郵送され、遅ればせながら全員にコメントをつけることができた。もっと演習に時間を割ければ、字幕の体裁など細部まで徹底できたのにと、自らの不明を嘆くのであった。

「沖縄を字幕制作の拠点に」コミックリズ(株)小川さんインタビュー

講座の立ち上げに携わり、字幕社に講師を依頼して下さったコミックリズ(株)の小川詩乃さんに、プロジェクト発足の経緯や今後の展望を聞きました。

■講座開設の経緯を教えてください

コミックリズ社はかねてから中国語の映像コンテンツのローカライズを行っていましたが、翻訳については外部に出していました。これを内製化するべく07年5月、沖縄に翻訳の事務所を設立。現地で字幕のスタッフを5人雇用して2年間やってみたとこ、うまく行ったので、地域貢献の意味も込め、講座開設に至りました。開設にあたって、厚生労働省から地域雇用創造推進事業の補助金が出たことで、受講生たちには教材費の3千円だけで機会を提供できました。

■苦労された点は？

自分たちも、制作から講座の運営という新しい分野に挑戦するわけで、まずは不安だったこと。ただ、2年前から沖縄に拠点を持っていたことが、現地の人たちのニーズに即した運営をするうえで、強みになりました。講師を選ぶ時にも、自分で翻訳ができることプラス教育という視点でやってくれる方を探さないといけなかったし、沖縄に現地入りしてくれる方でないといけなかったのですが、韓国語は西ヶ原さんがいてよかったです。

■受講生の反応は？

皆さん、ドラマが好きとか言葉が好きとか、好きなこと

としてやっているの、楽しく勉強できているのがうれしいです。字幕の難しさや日本語の難しさに気づき、宿題にも積極的に取り組む姿を見ると、やってよかったなあ。今後、それをどう仕事へと切り替えていけるかが懸案です。

■今後の課題や展望を教えてください

受講生は実践がまだだということで、自信がついていないと思います。ある程度仕事を用意したり、トライアルの情報を伝えたり、受験のサポートをしたりと、字幕を具体的に仕事として考えられるよう、準備を進めていきたいです。また発注側も、素材を送るのに時間がかかるとか、会社に打ち合わせに来てもらえないといったところで不安を感じている方も多いので、実際に私たちが社内で、中国語がこれだけうまく行っていることをアピールしながら、不安を解消する役割ができたらと思っています。

■字幕社ジャーナルの読者の皆さんへ一言

頑張っている人たちが世に出ていけるチャンスをいただけるよう、よろしくお祈りします。お仕事をいただけた暁には、沖縄にご招待というのも考えています(笑)。きれいな海に囲まれた沖縄で楽しく仕事ができる夢を、叶えていきたいと思っています。



受講生の感想

今回の講座を通して、字幕翻訳という新しい世界に出会うことができました。字幕翻訳は、文字数に制限があり、画面に出ている短い時間で、的確にセリフのニュアンスを伝えなければなりません。原語との距離感を保ちながらも、映像の世界観を表現できる自然な訳をつけること。それができた時、例えようのない充足感に包まれます。しかし、映像に字幕をつけるという作業は、思っていたよりかなり難しく、色々な知識が必要だと痛感しました。

講座では、字幕をつける際の様々なルールなどの技術的な事はもちろん、視聴者の立場に立ち、正確かつ魅力的な字幕をつける事など、翻訳者として心がけなければならない多くを教えてくださいました。理論だけでなく、SSTを使って、様々なジャンルの課題をこなす実践的な講義は楽しく、約3か月という短い期間ながらも、内容の濃い充実した講座でした。沖縄で、このような字幕翻訳の講座が受けられたことは、本当に貴重な体験で、沖縄の新しい未来の為に素晴らしい試みだと思えます。最後に、今回の講座の為にご尽力くださった全ての方々に、深く御礼申し上げます。(仲松貴子さん)

今回、字幕翻訳の講座を受講して素直に感じたことは、「面白い!」と言うことでした。同じ韓国語でも、内容や場面によって翻訳される日本語が変わってくることや、言葉の選び方によって、内容の捉えられかたやイメージまでも変わってしまうことには驚きでした。驚きと、難しさで頭を抱えつつも、この講座を受講した3ヶ月間は「面白い」の連続でした。残念なことに、沖縄ではこの様な講座や、技術を学ぶ学校がほとんどありません。やりたいと思っても、沖縄になければ本土に出るしかないので、実際、実行に移すためには一大決心が必要になってしまいました。

しかし、今回この字幕翻訳の講座が沖縄で受講できたということは、「沖縄で語学を生かす職業＝観光業」とは違った、新しい方向を見ることのできる良い機会になりました。講座の期間、沖縄に足を運び、教えてくださった林原先生と朴澤先生には大変感謝しています。沖縄でこのような講座が続けられると、次に受講する人たちもまた新しい道を発見できるようになります。とても素晴らしい講座だと思えました。(高良法恵さん)

雑記 林原 圭吾

字幕翻訳に携わって12年、その間何度か講義の依頼を受けたことがあるが、すべて断ってきた。世の中に何かを発信する行為には、時にリスクが伴う。技術流出といった、しみわたったリスクから、事実を歪曲されたり、金儲けだけの売名行為だとそしりを受けたりするリスク、はたまた自分で気づかないうちに、差別や不平等に加担してしまうリスクまで。臆病な筆者には、求められるものを提供して対価を得ているほうが気が楽だ。

そんな筆者が今回、講義を引き受けたのは、2つの意味で「そこが沖縄だから」だった。

講座を運営するコミックリズ社から、「沖縄に字幕制作の拠点を作ろう」と言われた時、その実直さに心打たれると同時に、「まあ、無理だろう」という考えが先に立った。確かに字幕の作業自体は、ネット回線さえあれば、世界中どこにいてもできる。しかし、肝心のオファーを取ってくる段階で、東京にいることの有形無形のメリットは計り知れない。筆者は、仮に沖縄に字幕制作の拠点ができたとしても、字幕社の仕事が減ることはないだろうと考えた。また、字幕社のスクーリングを受けた人が一定数できるわけで、人材の後背地が確保できる。字幕社にとってそれはメリットこそあれ、リスクのない行動であった。

とはいえ、そういう打算ばかりではなく、行ったこともない沖縄という地に特別な感情を抱いていたことも事実である。沖縄では近年、失業率を全国平均並みにするキャンペーンが行われている(今回の講座もその一環である)が、そうした現状も、沖縄戦や27年に及び占領、米軍基地といった出来事と無縁ではない。自分が翻訳を教える、1人でも2人でも雇用が生まれるのであれば、それは社会の公正さに寄与することになると考えた。

ところが、沖縄を訪れるにつれ、だんだんと迷いが生じてきた。一番大きいのは、ノー・リスクという「逃げ」が、自分の中で苦しくなってきたこと。せめて講義だけでもと、最善を尽くすのだが、本気に

なればなるほど、不誠実なことをしている感覚がぬぐえない。罪悪感を振り払うかのように、自分の経験や考えていることを包み隠さず受講生に話した。業界の仕組みから、仕事の取り方、字幕翻訳で食べていけるのかいかに奇跡的か、沖縄にいながらそれを志すことが、いかに無謀に思えるか、などなど。

同時に、沖縄のために何かをしたいという気持ちは増すばかりだ。夜のコザの街を歩けば、休息を楽しむ米兵たちとすれ違う。反射的に襲ってくる理由のない恐怖に、思わず目をそらす。だが、ライブハウスで隣に座った米兵は、筆者に笑顔で接し、音楽談義に花が咲く。そんな「良き隣人」(米軍の好感度アップキャンペーンの標語)との同居は、受講生たちにとって「生まれた時からあるもの」だ。

沖縄戦の激戦地だった嘉数の高台から普天間基地を一望していて、「大きななぶ」の話を思い出した。大地に、そして地域に、これだけ深く埋め込まれたものを引き抜くには、たとえ微々たる力であっても、皆が持ち寄り、養っていくほかない。自分が翻訳を教えることが、そんな微力のひとつになることを願う。

受講生たちと食事をしている時、悩みが口をついた。「沖縄ということで構えてしまう」と。「同じことは韓国との関係でも経験したが、散々格闘して、やっと自然に接せられるようになった。沖縄とも、いつかそうなるだろう」と続けた。受講生たちが気を悪くしなかったか、今でも心配だ。「どうしても何も考えずに接せられないの?」「韓国と沖縄って、お前にとっては一緒なの?」「鳥取との関わり方で悩むって言われたら、どうよ?」「感傷的になられても、私たちにどうしろっていうの?」——まったくだ。悩むことは、『世界』とか『情況』とか、そういうところに任せて、受講生のため、自分のため、字幕社のため、そして沖縄のために、今の自分にできることを、慎重かつ果敢にやっつけていこう。思わぬ難題を背負うこととなった今回の講座だが、同時に、引き受けて本当に良かったと思う。

女優でらちなつの 目指せ映像翻“役”者

てらちなつ冠企画第2弾。今回は吹き替えの勉強を小休止して、12月のヨン・ジョンフンのファンミーティングをレポートします。

“ドンウク”と聞いて“ドンチョルの弟”とピンとくる方は、かなりの「エデン」通ですね。日本では去年4月からCSと地上波で放送がスタート、現在も放送中の「エデンの東」。主役ドンチョルを演じるソン・スンホン氏の人気もさることながら、弟のドンウクを演じるヨン・ジョンファン氏も、ファンが急増中。

そんなヨン・ジョンファン氏の「クリスマスファン・ミーティング」に参加できるチャンスが！わが社が日頃お世話になっているデジタル・アドベンチャー様よりご招待をいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。うふっ。仕事冥利につきるとはこのことですね。去る12月25日は、娘とドレスアップして会場の大田区民ホールへ向かいました。

会場に入ると、ステージに用意された大きなツリーに大興奮！幻想的なライティングにうっとり。会場内にはヨン・ジョンファン氏“命”のファンの方々の熱気が充満。いまかいまかと待ち焦がれているファンの皆様はまさに“恋する乙女”でした。年齢などまったく関係ないのです。10代からおそらく70代？の恋する乙女が、ジョンファン氏にくびっただけ（死語？）。

いよいよ開始時間です。みんなの意表をついて、客席の会場扉からの登場。いやあ〜、眩しいのなんのって。私にも見えました。完全に見えちゃいました。オーラってものが！オーラって、雰囲気を感じるものかしら経験がなかったのですが、こんなにはっきりくっきり「見えた」のは初めてです。終始ため息があちこちから漏れていたのもうなずけます。

イベントの司会進行役は「エデンの東」日本語吹き替え版で主役のドンチョルを担当している、俳優の越村友一さん。「エデンの東」の名場面をジョンファン氏が日本語で、越村さんが韓国語でアフレコに挑戦したコーナーは会場中が盛り上がりしました。何よりも、笑顔がやさしい気さくなジョンファン氏の素顔に触れたひとときとなりました。会場にいる一人ひとりとの握手の際、10歳になる娘がどうしても韓国語で気持ちを伝えたいと言うので「キップダ (기쁘다) =嬉しい」と教えました。「キップダ」と必死に思いを伝えた娘にジョンファン氏は「네(はい)」ととろけるようなスマイルを。記念に一緒に写真を撮っていただき、大満足なクリスマスとなりました。今はその「“ドンウク”と過ごしたクリスマス」の写真が届くことを心待ちにしているところです。

編集後記

シネカノンが民事再生法を申請。詳細は分かりませんが、同じく韓国に携わる者として他人事とは思えません。まあ、うちなんかとはスケールの違うところとお見受けしますので、きっと再起を期しておられることでしょう。ファイティン！【編集長代理】

西ヶ原字幕社のモ/ですが ①

西ヶ原字幕社の事務所の中を紹介して、社風をお伝えするコーナー。第1回は肩こりたちの味方、マッサージチェアです。



2009年7月に、荻窪駅前のリサイクルショップで4万円で購入。発売当時は12万円くらいしたと思うので、かなり買い得だった。欲しいと思う人は多くても、かつて「ウサギ小屋」と言われた日本人の自宅にこんなものを置くスペースはなかなかない。店としても邪魔なので、早くさばいてしまいたかったのだろう。

話はそれるが、リサイクルショップは市場原理が露骨に働いていて面白い。以前、地元のリサイクルショップに立ち寄ったら、ヤマハのサックス（美品）が半値以下で売られていて、衝動買いしそうになった。誰か吹くんだ？と思い踏みとどまったけれど、御茶ノ水より安いんじゃない？うちの田舎じゃサックス吹こうなんて人、そうそういないもんね。

話戻って、終日パソコンと向かい合う映像翻訳者にとって、肩こりは永遠の悩み。ここでワーク・シェアリングならぬチェア・シェアリング。福利厚生あるいは事務所利用を促す客寄せパンダとして、これを事務所に置いたところ、これまで社員のために打ってきた施策の中で最もヒット。事務所移転の際には、設置場所をめぐって取り合いが起きるほどだった。結局社員のスペースに置かれることになったマッサージチェア。購入した当人は、朝誰も来ていない間にこっそりと座って、1日の英気を養うのであります。

羊元 現在の料金 (@映像10分)

字幕翻訳	吹き替え翻訳
15,000~18,000円	22,000~25,000円

※詳しくはホームページの料金表をご覧ください